

日本通訳翻訳学会・研究法・論文執筆プロジェクト・日本言語政策学会共同主催

公開ワークショップ 「エスノグラフィー法」

コーディネーター 新崎隆子（東京外国語大学）

言語と社会に関する研究テーマにエスノグラフィーの方法を応用する試みの歴史は古い。こうした試みの蓄積はエスノグラフィーの特性が言語と社会にかかわる研究課題の視点と問題意識に重なるからにはほかならない。近年のグローバル化をはじめとする社会変容は、言語研究へのエスノグラフィー法の貢献可能性を高めている。人々はさまざまな事情で言語圏を越境する。越境する際のライフステージも、滞在期間も、目的もさまざまである。言語が異なることで生じる問題も、その解決策も、人材の蓄積も、人々の経験知の共有方法もさまざまである。エスノグラフィー法はこうした場の力動や関係性、課題を丁寧に描き出し、社会的な知として蓄積することを可能にする手法である。このワークショップでは通訳と翻訳という異言語話者の橋渡しをする営みが行われる現場において、エスノグラフィーを援用する意義と可能性がどこに見出し得るかを検討する。また、エスノグラフィー法を活用しながら調査研究に取り組む2つの研究事例を通して、エスノグラフィー法の実際、その面白さと難しさに触れ、将来的展望を参加者が共に考えることを目的とする。

日時：2015年11月8日（日） 13時30分～16時30分（13時受付開始）

場所：青山学院大学 青山キャンパス、14号館（10階）、第18会議室

アクセスマップ <http://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/access.html>

キャンパスマップ <http://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

参加費：無料（要予約）

参加申込：参加を希望される方は、氏名、住所、所属先、学会員・非学会員の別を明記の上、以下のいずれかにメールでお申し込みください。

日本言語政策学会：事務局 jalp.jimu@gmail.com

資料準備等のため11月3日までに申し込みをしてください。定員に達し次第、締め切らせていただきますので、早めのご予約をお勧めいたします。

プログラム

総合司会：新崎隆子（東京外国語大学）

13:30～13:40 開会&趣旨説明

13:40～14:20 講演「通訳・翻訳の社会的意義とエスノグラフィー」

猿橋順子（青山学院大学）

14:20～14:30 休憩

14:30～15:20 研究事例報告

（１）板谷初子（日本通訳翻訳学会会員）

（２）斉藤奈穂（日本言語政策学会会員）

15:20～15:30 休憩

15:30～16:20 ディスカッション（ファシリテーター：猿橋順子）

16:20～16:30 総括&閉会

講演：通訳・翻訳の社会的意義とエスノグラフィー 猿橋 順子

講演概要

通訳・翻訳を取り巻くさまざまな研究課題にエスノグラフィー法が応用・援用されるのは、エスノグラフィーが内包する以下のような特徴に惹きつけられてのことであろう。第一に、個人を対象とした研究の積み重ねでは到達しにくい人々の相互作用や場の力動にアクセスができること。第二に、組織の代表者や政策立案者が提示する理想像とはしばしば異なる「内側の論理」や「内側の視点」を探求することができること。第三に、フィールドワーク中の発見に応じて研究設問や研究デザインを設計し直すことができること、である。こうした方法論上の強みはエスノグラフィー法を応用する誘引ともなるが、同時に課題も引き起こす。フィールドの選定とエントリー、調査協力者との信頼関係の構築、解釈と理論化の妥当性、調査協力者への還元などはエスノグラフィー法を用いる上で常に議論されてきた課題である。これらに加え、通訳・翻訳に係るエスノグラフィーでは、二つ以上の言語文化の関与と相互作用が前提となることで浮上する課題に向き合わねばならない。本講義では、エスノグラフィーについて研究論文や学術書で触れたことはあっても、実際に自身の研究に取り入れてみたことはない人、これから取り入れてみたいと思っている人々を主な対象に、通訳と翻訳を取り巻く研究テーマのどのような側面がエスノグラフィー法を援用するのに適しており、どのような手続きや心構えが必要かについて具体例を交えて紹介する。

講師略歴

猿橋 順子 （さるはし じゅんこ）

青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科教授。博士（国際コミュニケーション）。専門は社会言語学、言語政策研究。日本に暮らす外国人コミュニティを対象に、彼らにとっての言語問題とその対処法、言語とエンパワメントの関係に注目して調査研究

に取り組んでいる。

主著に『コミュニケーション研究法』（共同編集・共同執筆、ナカニシヤ書店、2011 年）、エスノグラフィー法を援用した研究論文に「多文化共生活動における差異・共通性・パワーの認識」（多文化関係学会編、『多文化社会に日本の課題：多文化関係学からのアプローチ』収録、明石書店、2011 年）、「エスニックビジネスにおける言語管理とエンパワメント：高田馬場界隈のビルマレストランを事例として」（『青山国際政経論集』第 89 号、2013 年）などがある。

事例報告 1. プロ野球通訳者の役割 板谷 初子

発表概要

平均的な日本国民が一番よく目にする通訳風景は、プロ野球中継のヒーローインタビューではないだろうか。活躍した選手の喜びの声を代弁し、訳す度に観客から歓声が上がる光景を見て、プロ野球通訳者という職業に関心を抱く人も多いはずだ。しかしプロ野球通訳者の職業観、アイデンティティ、信念、動機づけ、行為などが明るみに出る機会は少なく、また、「通訳」という同じカテゴリーの職業につきながら他の通訳者たちとの交流もほとんど無い。本研究は、エスノグラフィーの観察法及びヒーローインタビューとぶら下がり取材の通訳データー、さらには通訳者、外国人選手、球団スタッフ、野球ファンへのインタビューを通じて、プロ野球界で通訳をするというのはどういうことなのかを明らかにする試みである。

ワークショップでの発表時には、あるプロ野球球団で数回の観察及び通訳データー収集を行い、さらに 2 人の外国人選手にインタビューを終えている予定である。研究段階としてはまだ始まったばかりであり、研究設問や研究デザインを修正しながらの試みであるため、この発表の機会に社会学言語学、通訳学などの見地から皆様の助言を賜ることができればありがたい。

本研究が、通訳学研究のみならずスポーツ通訳者を含めた通訳実務者にとって、そして何よりも調査協力者である球団の通訳者及び関係者にとって、有益なものになることを目指している。

発表者略歴

板谷 初子（いたや はつこ）

北海道武蔵女子短期大学英文学科准教授。北海道大学文学部卒業。英国ノッティンガム大学大学院英語教授法修士課程修了。大学受験予備校英語講師、高等学校英語教諭を経て 2014 年より現職。受験生指導を長年行い、全国大学入試問題正解・英語の分析及び英語教授法研究に取り組んできた。通訳経験をきっかけに通訳学に関心をもち、プロ野球通訳現場のフィールドワークを開始する。『入試問題正解』（旺文社）解答解説委員。『集中マスター英

語長文問題集レベル①』（旺文社）執筆。

事例報告 2. 特別支援学校の多言語情報発信 齊藤 奈穂

発表概要

都内には 66 校の特別支援学校、養護学校がある。これらは様々な配慮を必要とする児童・生徒のための学校で、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の 5 部門がある。発表者は知的障害のある高校生が通う都立特別支援学校の教員である。自分の名前を書くことが難しい生徒から、中学校程度の学習が可能な生徒まで、実態の幅は大きい。

2014 年 4 月から学校見学・教育相談の担当をしている。担当になって間もない頃、「相談したい」と切羽詰った様子で訴える日本語に不慣れな外国人親子の訪問を、突然受けた。このようなことは、日本語の情報を広域コミュニケーション言語である英語に翻訳して発信すれば解決されるのだろうか。いや、課題はそう単純ではない。どのような情報を、どのように発信すべきなのか、調査、実践、評価をしながら根拠を踏まえた研究という形をとらなければ、課題解決に近づくことはできないと考えた。

実践現場から志向する研究には最悪の場合、「中止」というリスクが伴う。しかし、一人では到達しえない、到底得ることのできない、様々な関係者がいるからこそ得られる成果や気づきを研究の中に循環させることのできるメリットは大きい。現在進行形で試行錯誤中だが、この機会に参加者の皆様から御意見を賜ることができればありがたい。

発表者略歴

齊藤 奈穂（さいとう なお）

青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻、修士課程在学中。
青山学院大学文学部史学科（日本史）卒業。現在、都立特別支援学校主幹教諭、特別支援教育コーディネーター、東京都教育委員会主管のキャリア教育研究会喫茶検定部会事務局長。